東京大学　留学プログラム報告書　（プログラム名：2012 IARU Global Summer Program）

所属学部/研究科・学年（留学時）：教養学部文科一類・2 年
留学先大学・参加コース：コペンハーゲン大学・Security: Theories, Practices and Dilemmas of Widening the Concept
コース期間：2012 年 8 月　13 日　～　2012 年　8 月　24 日
卒業・修了後の就職希望先：　2.専門職（医師・法曹・会計士等）

1．留学先大学の概要

コペンハーゲン大学は、デンマーク最大の研究・教育機関であり、近年では授業の大半は英語で開講されています。これにより、本国のデンマーク人学生のみならず、世界中から来る多くの学生に対し、高品質の授業を受ける機会が与えられています。現に、2011 年度の学生　37,869 名中（学部・修士生含む）に対し、6,047 名　(交換留学生・ゲスト・学位取得予定学生含む)もの留学生が在籍しているそうです。一方、コペンハーゲン大学の学生の多くは、修士号取得までを視野に入れ勉学に励んでおり、海外留学やインターンシップにも積極的に取り組む等、彼らからも多くの刺激を得ることが出来ました。また、授業中はレクチャーの中に、学生への問答や学生からの質問機会が多分に設けられており、充実した学習経験となりました。

2．留学の動機

IARU GSP が、大学レベルで繰り広げられている他国のアカデミックなコンセプトの理解、そしてアカデミズムへの強い意識を持った他国の学生との意見交換の場となる点に魅力を感じました。GSP　は、世界をリードする研究者・学生と共に、内容面・語学面とも自らが東京大学入学前は触れられなかった高い大学・大学院レベルでそのような体験を得られる貴重なチャンスだと思いました。また、GSP　は、長期留学とは異なり、教授方や学生が通常の研究・大学生活を営みながら参加できるため、各大学・文化の文脈の中で得た視点を一堂に直接持ち寄り、その共通点や差異を探求できる場だと考え、応募させていただきました。

3．留学の準備

①プログラムへの参加手続き（申請にあたってのアドバイスなど）
志望動機の作成のみならず、担当・指導教員の方のご署名や夏学期の履修に関する懸念払拭等、時間が必要となりますので、前々からの準備をお勧めします。

②ビザの手続き（ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど）
日本国籍所有者はシェンゲン加盟国（デンマークも含む）に 6 ヵ月間で 90 日間以内の滞在の場合、シェンゲンビザは必要ないため、特に手続きはありませんでした。

③保険関係の準備（加入した海外旅行傷害保険・留学保険等）
コペンハーゲンにもキャッシュレス提携病院を持つ JI 傷害火災保険株式会社の海外旅行保険に加入しました。

④留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど（履修・単位・試験・論文提出等に関して）
滞在が 8 月半ばと、夏季休業中だったため、特に手続きは必要ありませんでした。ただし、進振りの登録期間と被っていたため、滞在先からインターネットを通して登録しました。（これに関しては、滞在先大学が提供してくださった寮にインターネットが整備されていたため、支障はありませんでした。）

⑤語学関係の準備（出発前の英語レベル・語学学習等）

普段から、中級英語、学外の英語クラスや、毎週昼休み中に英語でディスカッションをする企画等、英語を使う場所に積極的に参加していました。また、時事関連の英字雑誌や海外メディアの電子版記事も日常的に読むよう心がけていました。さらに、IARU GSP のために、滞在先大学から課された課題図書をしっかり読む等準備を重ねました。

⑥日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

【日本から持参した方がよいもの】

・アダプター：日本とプラグの形が異なるため、アダプターを購入する必要があります。

・デンマークでも使用可能な携帯電話：公衆電話がほとんどないため、念のため携帯電話の準備をしておくと安心だと思います。なお、通常使用している携帯会社からデンマークにも対応している借りる場合には、手続きに日数を要しますので、前持った調査・申し込みが必要でした。

【その他出発前にやっておくべきこと】出発前に、滞在先の情報収集を重ねておくと、滞在をより有意義なものにできると思います。具体的には、文献サーチが必要となった時のための図書館所在地・開館時間に関する情報、コピー機等の学習関連設備情報から、交通・観光地情報、治安情報等です。可能であれば、数日早めに入国し、現地のシステムに慣れておくとスムースではないかと思います。

4. 留学生活について

①住居（住居の種類（寮・ホームステイ・ルームシェア等）、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など）

【住居の種類】滞在先大学の Housing を通し、寮を提供していただきました。

【家賃】DKK4700（¥65800 程度)、及び、デポジット DKK4500（¥63000 程度）

【宿舎の様子】寮自体は個室、各部屋キッチン・トイレ・シャワー付となっていました。食器・ベッド・勉強机等の基礎家具は設置済み、プログラムに間に合う形で円滑に契約提携を進められ、また、多くの IARU GSP 学生と同様の寮に入ることが出来たため、滞在先大学の公的ルートを通して住居を確保し、良かったと感じています。

②生活環境（気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法（海外送金・クレジットカード）など）

【気候】8 月のコペンハーゲンは、最高気温/最低気温の月平均が 21℃/12℃と涼しいうえに、朝晩の温度差が大きかったです。また、8 月はコペンハーゲンで最も雨量が多い月であるため、折り畳み傘は必須だと思います。なお、夜は 9 時頃まで明るかったです。

【大学周辺の様子】授業が開催された Faculty of Social Sciences キャンパスは、寮からバスで 20 分程度のコペンハーゲン中心部(Norreport 駅付近)にありました。近くに大学図書館やスーパーマーケットが多くあり、また、数々のバス・電車が通るターミナル駅でもあったため、利便性が高かったです。

【交通機関】バス、鉄道（近距離中心の s-tog 及び長距離中心の Regional）、メトロから構成されており、どれも頻度が高く、快適でした。鉄道会社 DSB のチケットオフィス（寮の鍵の引き取り場所となっているコペンハーゲン大学 International Office がある Norreport 駅付近に一軒あります）で、回数券や定期券を購入出来ます。

【食事】外食は、美味しく、ボリュームがあるものの、概して日本よりも割高でした。（コペンハーゲン市内ですと、パン屋さんならば 1000 円以内で食べられますが、レストランの多くはそれ以上の値段形態が主流でした。）よって、朝食、夕食はスーパーマーケットやパン屋さんで食材を確保し、自炊することが多かったです。また、昼食は大学のカフェテリアでとりました。こちらは東大の食堂と同じくらいの価格携帯でバラエティーに富んだ洋食がオファーされており、良かったです。（現地の学生はサンドイッチ、パンや生野菜等の昼食を持参していることが多かったです）

【お金の管理方法】日本出国前に必要な金額分をデンマーク・クローネに両替し、念のためクレジットカードも携帯していきました。デンマークでは、クレジットカード使用が普及しており、コンビニやスーパーマーケットでの買い物等、日常的場面でも、多くの人々がカード払いをしていました。なお、カード払いの際は、サインではなく、4 ケタのピンコードを

機械に入力するスタイルが主流でした。

③危機管理関係（留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など）
【留学先の治安】デンマークは、貧富の格差も少なく（OECD の統計によると、2000 年代後半のジニ係数（徴税・分配後）は日本が 0.348、デンマーク 0.218 だそうです）比較的治安が良い方だと思います。しかし、寮が所在する Norrebro 界隈は、個人的に身に危険を感じる場面はなかったものの、移民が多く、コペンハーゲンの中では治安があまり良くない方だとされています。いずれにしても、夜間の一人歩きは避ける、鞄の管理に注意するなど、日本にいるとき以上の注意を払うことは言わずもがなだと思います。
【紛失・盗難に備え】貴重品（パスポート、クレジットカード等）の紛失・盗難に備え、それぞれをコピーを取っておくとともに、領事館の住所・電話番号や、クレジットカード会社の電話番号等は常に携帯しておくと安心だと思います。

④留学に要した費用とその内訳（航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算）
計約 367,800 円（内デポジット¥63,000 は、寮に問題がなければ数か月内に返還される予定です）
・航空賃：¥20,000
・授業料：¥0
・教科書代：¥5,000（論文や図書の抜粋等含め 1200 ページ程度相当の課題図書がありました。論文は電子版があったものの、図書は他の図書館からの取り寄せ代やコピー代がかかりました）
・家賃：¥65,800（追加でデポジット¥63,000）
・食費：¥21,000（食材費、外食代等）
・交通費：¥8,800（コペンハーゲン市内の定期券¥4700＋郊外への交通費）
・娯楽費：¥4,200（博物館への入館料等）

⑤奨学金（受給していた場合は、支給機関・支給額など）
東京大学を通し、
【支給機関】JASSO 様
【奨学金名】Scholarship For Short-Term Visit / Short-Term Stay Program
【支給額】80,000 円
をいただきました。

⑥学習・研究以外の活動（スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など）
【文化活動】大学院試験に向けての学習、通訳養成学校、短期国際交流カンファレンスを企画・運営する委員会のアルムニ活動等
【ボランティア】英語ディスカッションのオーガナイザー等

5. 学習・研究について
①履修した授業科目のリスト（そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。）
Security: Theories, Practices and Dilemmas of Widening the Concept

②留学中の学習・研究の概要（授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等）
【授業・印象に残っている授業】授業は基本的に 9 時から 16 時頃までで、セオリーを体系的に説明するレクチャー、実世界でそのセオリーが生きてくる現場に関わっている方からのレクチャー、及び、学生による前日のレクチャー内容の

プレゼン・ディスカッションの三部門により構成されていました。授業は、課題図書を前提として行われ、レクチャラーによる指導に留まらず、学生への問答や学生からの質問に多くの時間が割かれていました。また、現場学習部門も、各々の内容自体が興味深いだけでなく、当日授業で扱ったセオリーを援用して捉えられるほど綿密に授業と連動していました。例えば、授業で“Migration, Religion, and Identity”をテーマとした日には、右派政党 Danish People’s Party 議員から、同政党が主張するムスリム移民制限政策について伺いました。この際、実際に如何に“Identity”が構築されるかというセオリー通りのレトリックを同議員に垣間見、状況を分析しながら理解を深化させることができました。
【予習】課題図書の読み込み（ただしこちらは日本出国前にほとんど終えるようにしました）、及び、課題図書のメモ作成を授業日までに完了させました。授業直前に、メモをもう一度読み直しました。
【復習】翌日のディスカッションに備え、授業ノートを読み直しました。また、興味があり、プログラム終了後のエッセイで取り扱いたいと思った内容に関しては、留学中に図書の収集に努めました。

③学習・研究面でのアドバイス
課題図書が、主に授業での理解の下地、及び、ディスカッションでの疑問提示の端緒という役割を担ったため、読む際には、細かい点に固執するのではなく、核心的なテーマと論理構造を自分の言葉で言える程度までしっかり理解すればよかったと思います。また、さらに疑問点を書き留めつつ読み進められたらよかったと思います。

④語学面での苦労・アドバイス等
例えば IR の場面で多用される用語等、コースによっては、日常英語で使用頻度の低い用語が多用されることがあるかと思います。事前に課題図書等でそのような用語を見つけ、意味を調べておくと、話を理解する上での助けとなると思います。

6. 留学先大学の環境について
①留学生へのサポート体制（語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等）
【語学面】大学の学生・スタッフの方々は皆英語を話すことが出来、コミュニケーションの上での支障は全くありませんでした。
【学習面】プログラム用に割り当てられた Student ID を用い図書館、データベース、パソコン室、コピー機等、学習に必要な設備の利用が可能でした。また、これらに関する情報のほとんどが大学ホームページに掲載されており、日本滞在中に情報収集をすることが可能でした。

②大学の設備（図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等）
【図書館】授業を行った Faculty of Social Sciences キャンパス付近に、Faculty of Library of Social Sciences 及び Quick Stop Library がありました。また、大学の図書館システム REX（東大 OPAC に該当）を通し、最寄り図書館に書籍を取り寄せることも可能です。
【食堂】8 時から 15 時頃まで開いており、食事（パン、サンドイッチ、サラダ・ホットミールの量り売り等）や飲料等が比較的安い価格でオファーされています。
【PC 環境】キャンパス内には、IT Room と呼ばれるパソコン室があり、また、無線 LAN が整備されていました。また、寮には有線 LAN が配備されていました。

8. その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

Bain, Stone, and Cristian Bonetto. Lonely Planet Denmark. 2012. Lonely Planet: U.S.

安全情報やエチケット等も細かく説明されている点が良かったです。また、観光情報も最新で正確でした。

Rejseplanen . <http://www.rejseplanen.dk/>

公共交通機関の乗り換え検索が可能です。

Google Translator

デンマーク語でのみオファーされているサイト等を閲覧する際に、併用しました。

②今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

留学期間は瞬く間に過ぎ去ってしまう、と伺っていたので、機会を最大限活用する上での自己の振る舞い方を心に留めながら過ごすことを心がけました。私は、自分の学習・休養時間も大切にしながら、貪欲かつプロアクティブに授業・周囲の人々に働きかける姿勢を心がけましたが、姿勢は人それぞれ、他のアプローチ、より良いアプローチが沢山あると思います。いずれにせよ、目標を心に留めながら過ごすことは、短い留学期間をより有意義なものにしてくれるのではないでしょうか。

④その他東京大学のホームページ等に掲載可能な留学中の写真があれば添付してください。

授業開催地となった、コペンハーゲン大学 Faculty of Social Sciences の写真です。

従来コペンハーゲン大学は、街中に教室が散らばっている都市型キャンパスでしたが、近年学部ごとのキャンパス化を推進しているそうです。

2012 IARU Global Summer Program 学習成果に関するレポート

"A nation, like a person, has a mind—a mind that must be kept informed and alert, that

must know itself, that understands the hopes and needs of its neighbors—all the other nations that live within the narrowing circle of the world." This reflection by U.S. President Franklin D. Roosevelt expresses the necessity of cross-cultural understanding among nations, needless to say among individuals, amidst the increased pan-national relationships of the World War II era—the necessity of such an attitude is further mounting today, as the world becomes more interconnected and conflicts not only of the traditional political, military, or economic nature, but those of the societal and environmental nature urges international collaboration. IARU GSP, as a program that fosters pan-national education, ultimately further motivated me to work diligently toward my aspiration to study abroad in the long term. The program allowed me to gain acute knowledge in a new academic field, to absorb and reflect upon methods of learning, and to increase my understanding of conditions overseas.

The IARU GSP was an opportunity to acquire an innovative perspective into an academic field from inspiring professors. Generally, as theories often reflect geopolitical, societal, or other contexts of a research setting, it is inevitable that certain theories flourish in particular settings. For instance, the core theory explained in my course developed partly as a reflection of the complex history in the greater area surrounding the university and as juxtaposition to the traditional U.S.-centered theories. Hence, because GSP covers themes that adhere to each university's strengths, the course allowed me to absorb the concepts effectively—the professors, not only being specialists but being the pioneer and central researchers of the program's chief theory, captured the academic theme in a holistic and fruitful manner despite the time constraints. More specifically, reading materials, lectures, real-life application of the theories, and feedback were exceedingly interconnected and germane. This experience taught me the merits of venturing into a new environment and learning directly in a context where a certain concept had blossomed.

Furthermore, as I learned with students from a myriad of backgrounds, both inside and outside the formal class setting, I began to absorb their academic approaches and to reflect upon possible improvements of my own methods. Most significantly, the fellow students' learning habits exuded during questions and discussions showed their great alertness and engagement. In every setting, the students thoughtfully connected new theories with previously presented ones—they not only highlighted points that achieved the purpose of clarification, but points that further developed such theories. Therefore, by submerging students in such an environment, the GSP enabled me to exercise this approach, and it thereby provided valuable training and nurtured a healthy optimism that I may, with preparation and practice, be able to participate in a likely method when studying abroad again. Simultaneously, although I had been aware of this class participation dynamic from previous knowledge, it was shocking to re-experience this first hand at an advanced university and graduate level. This sense of awe enabled me to contemplate upon the improvements I could make when posing questions and to humble myself in amount of knowledge and critical thinking methodology that I must develop. In the long run, this revelation has driven me to proactively make connections among the materials that I learned, to seek the applicability of theories in concrete current events, and to genuinely fathom novel academic material on a daily basis.

Finally, the IARU GSP, which assembled experts and motivated students from various

settings, was an ideal arena to take advantage of the individual's fortes and to exchange intercultural and interdisciplinary information. First, the GSP, having been taught outside my home country, focused on urging problems that I had yet to fully grasp. For instance, as the program was conducted in Europe, the lectures enlightened me on the possible future for the EU. Although I had had the chance to read about the EU in history classes and the media, the revealing lectures and discussions with students who saw the implications of the EU in their quotidian lives exposed me to an authentic outlook of this era-transforming system. Moreover, students were given the chance to apply theories to significant cases pertinent to each participant's university location as well as majors. Through this process, students were better able to reaffirm the universality or to convey the complexities of the theories. This characteristic was prevalent in GSP, where experts and students assemble fresh perspectives from dissimilar majors and countries. A memorable case appeared upon discussing "identity" as a concept that existed only given the formulation of the "other." We then considered the situation in Denmark or Singapore, whereby the "Danish" or "Singaporean" identity was difficult to define individually and often were vocalized in relation to the new migrants, who are viewed as the "other" per se. Vis-à-vis the concept of "we/us" versus the "other," a sociology scholar also presented a research which illustrates people's prejudice toward the "other" as worthy of suspicion and conversely "we/us" as worthy of trust. This occurrence exemplifies the holistic learning experience that may flower when students from a wider range of contexts coexist.

Increased transnational movement of people and goods in recent times demands a smooth system that accelerates these transactions. However, I have realized that dissimilar contexts and people's yearning to maintain a sense of sovereignty deems the creation of a unanimous world view and the ultimate formation of a homogenous global system to be challenging. Nevertheless, steps to mitigate unnecessary conflicts and delay remain indispensable, and I believe ceaseless exchange of information and opinions is one simple, yet significant step that drives people closer to a world view constructed upon a more authentic understanding of the unique realities of the world. Ultimately, the IARU GSP was a significant opportunity that allowed me to appreciate the genuine value of one such place—an intercultural academic setting that enables aspiring students to explore a broader range of knowledge, ideas, and attitudes, to venture into an endeavor to become closer to *veritas*—and now feel empowered by a sense of newfound motivation to assiduously work towards the hopes of learning in such a stimulating environment again.

東京大学　留学プログラム報告書 （プログラム名：2012 IARU Global Summer Program）

所属学部/研究科・学年（留学時）：工学部/システム創成学科・3年

留学先大学・参加コース： University of Copenhagen・Security: Theories, Practices and Dilemmas of Widening the Concept

コース期間： 2012 年 8 月 13 日　～　2012 年 8 月 24 日

卒業・修了後の就職希望先： 2.専門職（医師・法曹・会計士等） 3.公務員　5.民間企業

1. Københavns Universitet の概要

Oxford とも少し似て，街と融合した立地の大学．カフェ，靴屋さん，またカフェ，…という並びにふと古い建物を見つけ，よく表札を見ると大学のオフィスだった．13 世紀，ヨーロッパ南部から大学設立の波が北上し，1479 年にコペンハーゲンにも教皇の許可が下りて，神学・法学・医学・哲学の庭として開かれた．当時の教員や学生は敷地に閉じ込められ，必要なものは全て周りの住民に提供されていたという．現在の学部は一部名前も変え，ノーベル賞を多数獲得している理系分野の学部も増設され，最先端の研究教育機関となっている．しかし町並みに沿える風情，人々の憩いの通り道となっている庭園 Botanics Have など，地元の人々との関係は形を変えて今も密に保たれていると感じた．

2. 留学の動機

・お世話になっている先生からの助言に従った

・小学生以来の英語の授業に対応できないのではという不安を解消したかった…

・海外の大学生が見た目ほど日本の学生と違うのか知りたかった

・コペンハーゲン大学と比べた本学の授業等の改善点・長所を認識しフィードバックしたかった

・本学を内側から国際化した場合に生じる長期スパンの問題について考えたかった

3. 留学の準備

①プログラムへの参加手続き（申請にあたってのアドバイスなど）

早めに書類を提出してしまうことと，電子媒体のものはこまめにバックアップを作っておくことを教訓として得た．

④留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど（履修・単位・試験・論文提出等に関して）

工学部では単位として認められないと言われた．個人的には気にならなかったが，制度上の不備（単位の認可，あるいは不認可の理由の提示）に常に無感動になってはいけないと思った．

⑤語学関係の準備（出発前の英語レベル・語学学習等）

何もしなかったが，リーディングリストを読んでその分野の語彙が補充された．

会話をしていて「日本人は概して話したがらない」と何度も言われた．「英語を母国語とする人が日本語を習うことと同等のむずかしさがあるから当然だと思うが」と言われたものの，英語のレベルの問題ではないと感じた．

⑥日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

アダプターは，当然ながら，日本製品を使うためのものは海外には置いていない．デンマークはコンセントが2種類あるということで，どちらに対応したものを買うべきか現地で見てからにしようと思い，結局友人のお世話になった．

4. 留学生活について

①住居（住居の種類（寮・ホームステイ・ルームシェア等）、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など）

大学からオファーのあった部屋を借りた. 同じコースの人と建物が一緒だった点は良かった. 一部市内の他の部屋を取っている友人もいたが, それもまた遊び先として面白かった.

因みにプログラム開催期間中, コペンハーゲン市内のホテルは一室残らず埋まっていたらしい.

②生活環境（気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法（海外送金・クレジットカード）など）

とても乾燥している. 浴室の換気扇をつけない, 多めにお湯を沸かして放置するなどの工夫をした.

お金は基本的にクレジットカードを使ったが, 大学内の食堂など現金のみの場所もある.

③危機管理関係（留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など）

医療機関にはかからずに済んだが, まず大学の医療センターに行くことを勧められた.

⑤奨学金（受給していた場合は、支給機関・支給額など）

JASSO(Japan Student Services Organization)から 8 万円支給された. 同じコースの他大学の学生に比べると少額だったようだ.

⑥学習・研究以外の活動（スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など）

Social Activities として, 遠足の日が一日用意されていた. シャンパンクルーズ・教会の見学など組まれていた. また休日の過ごし方についてもプランが提案されていた.

5. 学習・研究について

①履修した授業科目のリスト（そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。）

設定コースのみ.

②留学中の学習・研究の概要（授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等）

・1 か月前？にリーディングリスト・外来講師のプロフィール等配布

・授業：午前中は講義中心, 午後は外来講師・講演への出張中心. 翌朝, 前日の授業の総括となる発表およびディスカッションの時間が 1 時間あり, 学生は2～3人程度のグループで担当日を割り振られた. 読んだことや考えたことを反映して, ときに立場の大きく偏った講義内容をメインテーマと関連付けて考える作業はこの時間に行われた.

・講師は主催研究所のメンバー, メディア関係者, 政治家, 官僚など多岐にわたっていた

・留学終了後, 5000 語程度のエッセイ. 自分の出身分野・出身国にテーマを応用したり, テーマのメタ理論を考えたりすることが求められた

6. 留学先大学の環境について

①留学生へのサポート体制（語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等）

2週間ではあまり実感できることはなかった.

②大学の設備（図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等）

・大学の中庭や教室はとてもきれいだった

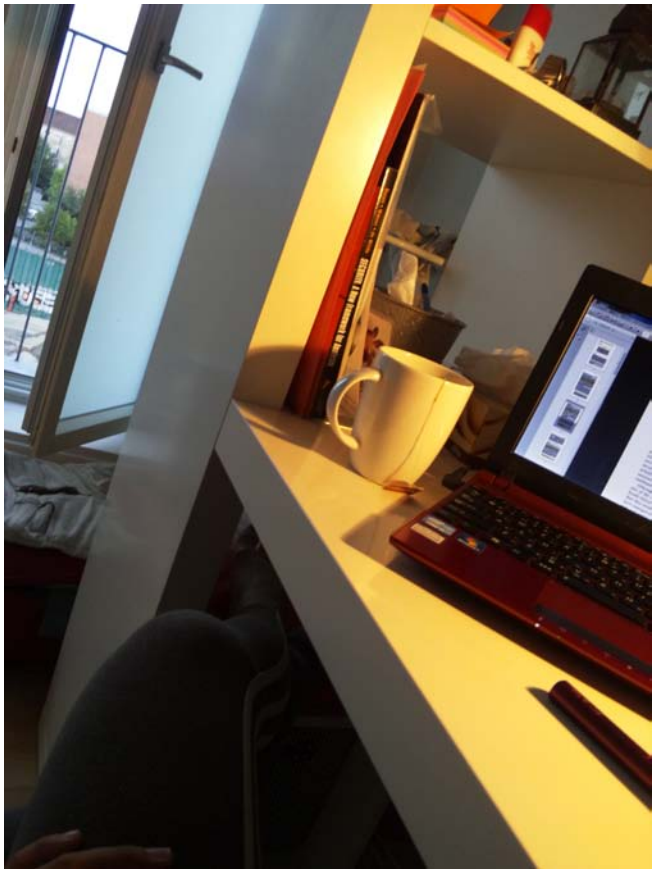
・新たに PC 用，図書館用の ID を申請しなければならず，またそのメールが6日目に到着した.
8. その他 ①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物 週末，単独での移動に乗り換え案内・グーグルマップを使った. ④その他東京大学のホームページ等に掲載可能な留学中の写真があれば添付してください。

朝ごはん

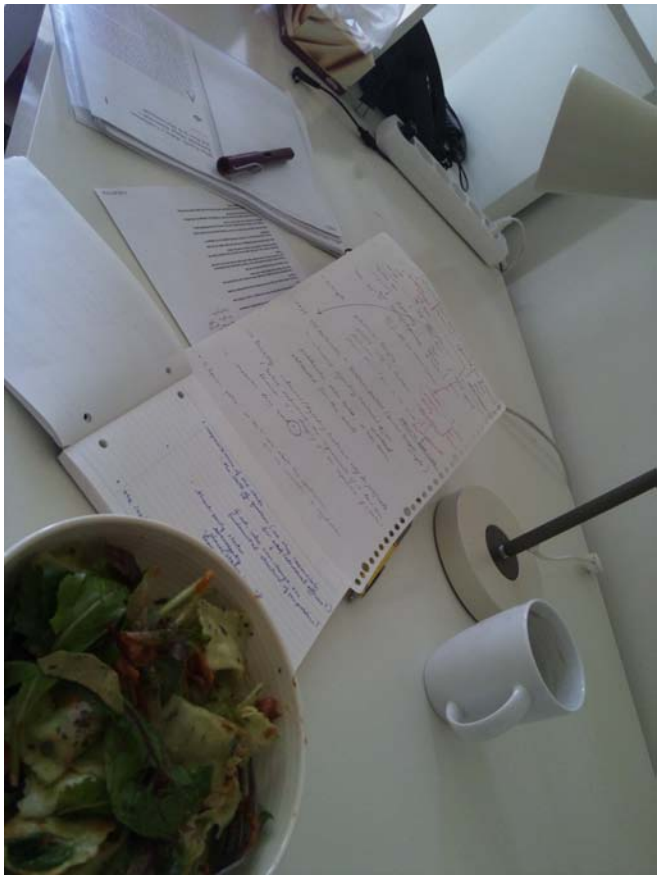
税務署？ホモセクシャル・ゲイ・レズビアン等の市民の教会での結婚を許可する立法を祝福している

町中に落ちていた Copenhagen Gay Pride のちらし

ピクニックに向かう途中に買ったパン



勉強机・棚．パソコンで翌日の論文を読み直している．



夜の 19 時を過ぎてもまだ明るい.

2012 IARU Global Summer Program 学習成果に関するレポート

1. 留学への意欲

留学への意欲は変わらない．まだ行きたい国や学びたい言語，ましてや学びたい事柄は尽きないものと思っている．

これまで旅行で海外を訪れた経験と比べると，IARU-GSP で留学したことの特徴は英語のために言葉の壁がなかったことだと振り返る．小学生以来の英語の授業に対する不安をほぐし，友達と英語を使ってジャパニーズな会話をして'You Japanese are so sweet' と言われつつ数日経ると，授業を英語で考える感覚が蘇り，更新された語彙に馴染んだ．授業中，手を挙げたが文章のまとまらないまま「…？」という空気を残してしまう失態の数も落ち着いた．発言に頷いてもらえた．休み時間に友達と議論の続きをしながらお手洗いを探した．結果，英語と，「大学」と和訳される異世界の住人と思っていた海外の大学生に対する劣等感は和らいだ．他方，デンマーク語を勉強せずに出向いてしまった後悔が残っている．

留学あるいは海外で活動することに対する意欲はありながら，千里の空路に向かう一歩を抑えてしまう原因がこの劣等感だったと思う．「海外の大学では 2 時間授業が当たり前」「チュートリアルを受けると否応なく口頭試問に強くなる」「プレゼンの練習なんてわざわざしない」「いくら分厚い本でもどこを読めば良いか一目で分かる」等々，留学にあこがれるような人ならばどこかで耳にする文句．しかし蓋を開けてみるとこれらが多少なりとも誇張された脅しであることは重要だと思わ

ない．それよりも，自分ができる限りの勉強をしていたことを受け入れられたことが大きかった．自分でこれ以上勉強できないと思うその考えがまるで甘く，海外で全く通用しないと知ることが怖く留学を考えないでいたように思う．この考え自体甘い．これまでの勉強にも勉強方法にも満足していない．だが日本にこの悩みを共有できる友人が何人もいる，その状況は変える余地があるのではないか．一つの提案として，リーディングリストを提案する（後述）．

2. 学習への意欲

学習への意欲は変わらない．しかしコースの中で興味を学びたいと思った語学や学問の分野はいくつかある．政治科学や，その中での科学技術社会論・環境問題の研究と重複する部分，またアラビア語，中国語など．

3. 国際理解への意欲

国際理解への意欲は変わらない．とりわけ「日本以外の場所」の文化や思考に対する興味は当初と現在の差を比較しても有意でない．日本がどのように捉えられているのかを実感したことで，自分の「日本」に対する理解を問い質された，という観はある．'200% deficit' 'homogenous society'という言葉に対してこれまで無頓着だったと思う．新たに得たこうした観点から日本の政治や経済や歴史一般の勉強に励みたい．

4. 今後の海外留学への関心

個人的な関心としては，工学部システム創成学科で原子力工学の中の放射性廃棄物処分に関わりたいため，この先アメリカの工学系の学部を目指すことも考えている．そこでは日本の従来の放射性廃棄物処分方法とは異なる機械的・制度的考え方を学びたい．また，その考えを支持してくれる仲間と会うことも期待する．求めるものを最大限引き出すためにも，現在の学科での勉強に励みたい．

一般的には，海外留学を「機会」とみている．試みが自分の関心から出発したものであっても，先生の推奨であっても，めぐり遭う経験は想像もつかないからこそ刺激的であると思う．学ぶ姿勢で海を渡ればきっと面白い体験ができる．すると現地の大学に通わない旅行との違いは，いつもと違う相手と学びを共有できることだろうか．海外留学に行きたくないと思うことはなさそうだが，日本で学ぶことが十二分に有意義な今，海外旅行との差はこの点に集約されるように思う．

5. コペンハーゲン大学と東京大学の教育制度の比較

様々な局面で問題視されている大学の国際化について，コペンハーゲン大学に留学した際，東京大学の学生として感じたことを端点に考えた．実際に留学中，予習・講義中・復習，また学生と先生の関係や授業の評価方法について細かな違いを多く感じた．それは両大学の置かれている社会・歴史を踏まえれば当然のものであるかもしれない．しかしここで挙げたものは，さほど時間やリソースをかけずに東京大学の教育制度に反映させることができると思われたものである．

5-1. 予習

初めて「リーディングリスト」という形で文献の一覧を渡されたときには，どのように読むべきものか分からなかった．しかし数日授業に出席してみると，講義や講師による違いはあるものの，どの場合も求められていたのは「各著者が議論に貢献した内容を掴むこと」だと気づいた．より正確

には，文章の意味している一から十まで理解してから講義に臨むことは求められていない，と気づいた．この点から二つ考えたことがある．一つは，中学校・高校・受験勉強時代から大学生になっても尚，日本の教育では授業を拡大して捉えることよりも焦点を絞って一層精緻に理解することが優先されていないかということ．無論いずれの方向へ思考を進めるかは全く時と場合と気分によるものだが，全体的に狭める方向への圧力が大きいと思う．この点，大量のリーディングリストは時折じっくりと読む参考書とは同じように扱えない．数ある論文の中で一つ一つが概略として何を意味していたかを念頭におきつつ，また一本論文を読んでその位置づけを考える，という作業は正確な拡大思考の良い訓練になると実感した．もう一つ，先生から指定してもらうリーディングリストの良い点は，その構成自体がまた一つの教科書となる点だと考えている．すなわち，自分で参考文献を探して読む場合，よっぽど勉強を重ねた分野でなければ，まずどの文献に当たるか，次は何というキーワードで資料を探すか，当てずっぽうにならざるを得ない．これもまた良い勉強になるが，もし先生からの指定があり，更に，読んできたことを前提とした講義を受ける機会があれば，分野・目的の条件によってどのようなジャーナルを選べばよいか，いくつくらい読めば良いか等の参考になる．例えば「政治科学の分野では在野で働いた経験の有無で論の書き方が異なる」「アメリカと大陸とで論調・思考パターンが異なる」「●●の著作は広く引用されているので，異なる解釈の系列を意識する必要がある」など，どの分野でもこうした経験的な知識は重要であろう．

予習の効果が明白であるにしても，制度に組み入れたところで確かにすり抜ける人はいる．しかし学生が楽に取得できる単位を好むとしても，すべてにおいて楽したいと思っているとは限らない．真に学問的好奇心から参加している授業もあり，そのためにエネルギー節約策も講じる，という人が多いのではないか．どのような授業が学問的好奇心をそそるのか．試される価値があると思う．

5-2.「先生」との関係

教室の中に 10 分いれば分かることもある．講師が複数いて，講義をしていない先生は学生に交じって座っている．そこから手を挙げて質問する．教室の中で先生が下の名前で呼ばれる．また，飲みに行く，人生相談をする，など一昔前の日本の方が散見された（？）学生と教員の関わり方が海外のいくつかの大学では健在と見える．

先生という（向こうではこう呼ばれていなかった訳だが）存在の意義を考え直すべきと考えるまじめな理由もある．学問は問いに価値を置くのであるから，先生が学生に先立って質問をすることの意義は本質的だ．この点の授業形態への考慮は学力低下につながってしまう learner-centered approach とのメルクマールといえるだろう．この視点を組み込んでいる東京大学の授業も多く，参加した限りで大変有意義だと感じている．

5-3. 復習

参加したコースでは復習をグループワークとして翌朝その結果を全体に発表した．当日・授業後は，その日の授業について他の学生と話して一番盛りあがるタイミングだと感じる．授業前（あるいは授業中）に話し合う場合と違って定着の効果が期待され，将来その授業で考えたことを呼び出しやすくしているものと思う．4 章でも触れたように，受け止め方が今回ほど違うクラスメートと議論できることの面白さも大きかった．自分たちはじっくり考えた内容を，（おそらく）復習していないクラスに伝える練習・人の話を聞いて自分なりに整理し，何を考えたか思い返す練習にもなっていたと思う．

5-4．授業評価

コース最終日に実施された綿密なアンケートには驚いた．個人で回答するコペンハーゲン大学のIARU-GSP 全体のアンケートに加え，ディスカッション形式で評価を共有し発展させる時間がたっぷり２時間設けられ，更にそこで口にすることを憚られた指摘については別紙・匿名のアンケート用紙が配られる．やはり，授業の中身に限らず，メタな視点で何が個々人にとって興味深かったかを聞くことは面白い．授業構成にとって有意義な発想が議論の中で芋づる式に引っ張り出されることもあろう．特に，ほぼ全授業共通の定型のアンケートに対してしばしば感じる回答しづらさは全く問題にならない．同時に匿名で回答する機会を保証する実質的な配慮も重要だと思う．

（以上）

東京大学　留学プログラム報告書 （プログラム名：2012 IARU Global Summer Program）

所属学部/研究科・学年（留学時）：工学系研究科・修士一年
留学先大学・参加コース：COP2 Security: Theories, Practices and Dilemmas of Widening the Concept
コース期間：2012 年 8 月 13 日 ～ 2012 年 8 月 24 日
卒業・修了後の就職希望先：(1.)研究職 2.専門職（医師・法曹・会計士等） 3.公務員 4.非営利団体 5.民間企業 6.起業 7.その他（　　）

1. 留学先大学の概要

コペンハーゲン大学 department of political science のキャンパスは都心にあり、五分歩いたら、すぐ商業地域に着くというような便利なところにあります。コペンハーゲン大学はとても歴史的で、世界中でも有名な総合大学です。とくに、知り合いのデンマーク人の友達によると、securitization についての政治科学の研究は世界のトップといわれている。

2. 留学の動機

学生のうちに、まだ時間がある時、できるだけたくさんのところにいってみたい、たくさんの人々と知り合ってみたいという思いで、本プログラムに申請しました。

3. 留学の準備

①プログラムへの参加手続き（申請にあたってのアドバイスなど）

IARU　GSP のプログラムはもともと、世界中の有名な大学のトップ教授先生たちからの授業を受けてみたい学生に設けているものなので、授業はいつも非常に専門的に難しいと思います。なので、できれば自分の本来の専門と近いプログラムを選んだほうがいいと思いますが、一致してなくでも（私の場合）、一生懸命頑張れば、非常に生涯にも役立てるものが勉強できます。

②ビザの手続き（ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど）

中国出身で、デンマーク大使館で申請すれば、二週間ほどシェンゲンビスをもらえます。

③保険関係の準備（加入した海外旅行傷害保険・留学保険等）

インターネットですべての旅行保険を購入することができますので、自分と適するものを選んで買うのが便利です。

④留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど（履修・単位・試験・論文提出等に関して）

専門と関係ない授業だったので、東大の単位に移さなかった。わざわざ授業のない夏休みに行うプログラムを選んだので、東大の授業、研究には一切影響なかった。

⑤語学関係の準備（出発前の英語レベル・語学学習等）

TOEFL、GRE のために英語勉強に熱心だった時期もあったんですけど、最近の二年間ぜんぜんやってないため、じぶんでも信じられないぐらいに下手になってしまいました。欧米のクラスは discussion 中心なので、できれば出発する前にできるだけ英語を勉強しとくのがお勧めだと思います。

⑥日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

Letter of admission。

入国審査の時、官員さんに見せる必要があるかもしれません。

4. 留学生活について

①住居（住居の種類（寮・ホームステイ・ルームシェア等）、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など）

大学の Keops という寮に住んでました、近くにスーパーがあって、学校までバスで 10 分行けるので、便利だったけど、高かったです。一ヶ月分の家賃払わないといけないので、デポジットも含めて、9200 クロネーを送金しました。もちろん、4500 クロネーはデポジットですけど。

②生活環境（気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法（海外送金・クレジットカード）など）

一番熱い時も 30 度以下なので、とてもいい気候だと思います。バスも地下鉄も便利だったけど、日曜日ほとんどのお店が閉まっちゃうのが不便でした。お金は適当の現金とクレジットカードがあれば大丈夫だと思います。

③危機管理関係（留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など）

非常に安全な町だったので、治安などにほとんど気にしなかったです。

④留学に要した費用とその内訳（航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算）

航空賃 24 万円、家賃 4700DKK、食費＋交通費＋娯楽費 3500DKK

⑤奨学金（受給していた場合は、支給機関・支給額など）

JASSO 八万円

⑥学習・研究以外の活動（スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など）

二週間だけ滞在したので、とても短かったけど、皆が親切で、すごく楽しく過ごした。週末は博物館に行ったり、新しくできたデンマーク人の友達とピクニックしたり、平日でも、学校で皆さんとお昼食べたりして、本当によかった。時間があれば、ずっといたくなりそう。

5. 学習・研究について

①履修した授業科目のリスト（そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。）

Security: Theories, Practices and Dilemmas of Widening the Concept

②留学中の学習・研究の概要（授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等）

授業の準備、あるいは pre-reading はとても重要。二ヶ月まえから reading list にアクセスできるし、実際の授業は時々いきなり reading list の中の論文について discussion 始まるので、あとは授業始まる前に全体的に少しだけでもイメージを捕まえるために、できるだけ pre-reading したほうがいい。

③学習・研究面でのアドバイス

欧米のクラスのスタイルでは discussion 中心、もちろん議論したくても自由だけど、やっぱりそういうアジアではあまり見られない熱い discussion の風景に一回でも入ったほうがいい。そしたら、授業の内容、疑問あるところ、もっと鮮明に頭の中に残って、自分のものになれる。

④語学面での苦労・アドバイス等

とにかく大胆的喋ってください。難しい言葉使えなくても、十分 communication ができるはず。

6. 留学先大学の環境について

①留学生へのサポート体制（語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等）

コペンハーゲン大学の全員（先生、学生、スタッフも含め）英語が完璧なので、語学面本当に心配いりません。あとデンマーク人皆親切なので、困った時いつでも声をかけてみれば、すぐアドバイスしてくれたり、手伝ってくれたりする人がいます。

②大学の設備（図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等）

図書館にはインターネットではアクセスしにくい重要な参考書籍がある。常に利用してみてください。食堂はまぁ、もともと私はアジアのお料理が気に入りなので、何もいえません。日本人の学生の中、弁当を作って、毎日持っていく人もいました。

8. その他

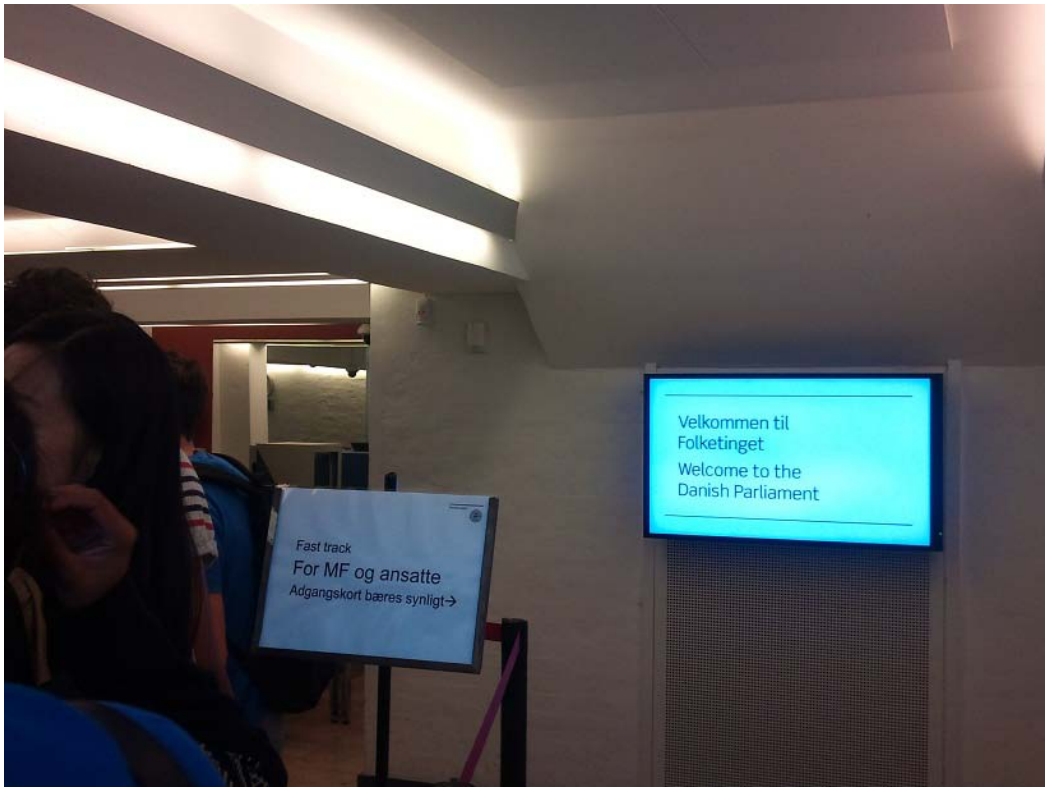
①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

特に参考していません。

②今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

行きたいなら、学生のうちどんどんいってみてください！学生は特別ですから。

④その他東京大学のホームページ等に掲載可能な留学中の写真があれば添付してください。



デンマークでとても有名なある政治家の講義を伺うため、 Danish Parliament に入ってしまいました。びっくり！写真は security check のところ。

午後はほとんど外に出て、専門家の講義を聞くので、これはいつも皆と一緒に Ministry of Foreign Affairs へ向かっている途中の風景。

週末のピクニックの Frederiksberg Have、めっちゃ綺麗だったよ！ビキニで sun bath のデンマーク人も一杯！ (*´∇`)

ある日、christania に行く前に、この church tower を皆と登りました、一番上まで行ったんだよ ^ ^

Church tower の一番上からみた風景

うまく撮れなかったけど、コペンハーゲンの一番有名なスポットにも！

2012 IARU Global Summer Program　学習成果に関するレポート

I am a master student from the School of Engineering, the University of Tokyo. This summer, I went to the University of Copenhagen to take a summer course called “Security: Theories, Practices and Dilemmas of Widening the Concept” organized by IARU with JASSO Scholarship.

Last year, the first time I saw the call for application on the bulletin board of my department, I simply thought it must be a nice experience to go abroad for several weeks in the summer vacation, taking courses from top professors, making friends with nice people from 9 other famous universities.

Then, when the application season started formally, I notice that the only course available during Japanese summer vacation is this course about political science held by the University of Copenhagen. (Later during my stay in Copenhagen, once the professor of IARU mentioned that IARU requires all the universities to make their best effort to schedule the course in July, due to some specific reason, COP2 course is the only exception.

At least, if I could be admitted by this program, it would become my first visit to Europe, and I think it must be extremely cool to have access to some famous professors' courses on the other side of the globe, though it is something different from my real major. In addition, the opportunity to improve my English and to get to know some other friends who I would probably never know without this program has also been an attractive factor for me.

After getting the letter of admission, a lot of preparation work is recommended to be done as soon as possible, including finding accommodation, booking airplane tickets, budgeting and money management issue etc.

Furthermore, pre-reading is common sense for political science students, therefore, a 1200 page reading list has been sent by the teaching assistant of the course around 2 months before the course really started. I was certainly surprised by the immense amount of reading, and due to many reasons, I was only able to do a light reading on several important papers.

Later in an interesting survey during the course, it turns out that only 1 student from Australian National University managed to go through the whole reading list before the course started. However, it is obvious that, the more active your attitude of study is, the more knowledge would be absorbed during the course.

Especially when this course is about a very professional research topic, called "securitization" first proposed by the professors in the University of Copenhagen, adequate pre-reading will help to build an overall framework on how this systematic theory works, so that during the course, students will be able to have the energy to focus on how to apply the theory to various patterns or actual cases effectively.

The object of pre-reading may be obvious for everyone, but it is fairly demanding for people to fulfill. As my high school teacher always indoctrinated, all depends on one's attitude.

Nevertheless, almost every student, including me, managed to cover over 50% of the reading list by the end of the course, which means that everybody has really made impressive endeavor during the course. I think I did as well.

Talking about what I have learned besides the professional knowledge in the course, there are really a lot.

Firstly, I have received so much inspiration by watching how the other excellent students from the other 9 universities participated in the IARU course. Initially, these students from USA, Britain or

other European countries are able to use English as fluently as their mother languages. Besides, western style of lectures is discussion oriented, the more thoroughly students involve themselves into the class, the easier it is to master what the professions are elaborating. Yet on the contrary, if one cannot participate in the brainstorm through discussion, it would make the course become tougher than typical Asian style lectures, because the answer to the discussed issues can seldom be found on the textbooks.

In addition to fluent English and vigorous performance during class, those friends have inspired me so much because it seems like that though some of them are as young as 19 years old (sophomore year), for some reason, they have been so noticeably confirmed about their future career, or I should say, their future dreams.

There's a student from Yale University who is in her sophomore year, besides the brilliant curriculum vitae, she is generally the most active student in the class. After two week's stay, I got to know from the conversations with her that, this aggressive attitude in the class is closely related to her enthusiasm towards the major she chose.

For the past more than 20 years, I have lived along with the principles called "best is better than appropriate". Thus entering a reputed high school is the best while entering the professional conservatory of music is not a wise decision; choosing the hottest discipline is the best while what is my real interest has never been profoundly considered…

After this summer school, I am reflecting which way is really better at the moment, to choose the best like what I did in the past, or to learn to recognize the most appropriate for myself. Artful is that I am right now at the stage of job hunting. Though I have seen so many schoolmates and friends who directly choose the most famous/profitable companies and address all their effort to the tests and interviews, I am now considering that a clear and thorough entrepreneurial study in the beginning will help us find the genuinely beloved job which we would like to work for the whole lifetime.

The 2nd inspiration I have been endowed with, is the way for formulation.

Since the 1st year in high school, I have chosen to study on science instead of liberal arts. Since then I have been insulated from any subject like history, political science and etc. Later in the university, I become an engineering student researching on wireless network. In the field of engineering, the ultimate objective is to find the correct answer/solution to the existent problem. In other words, problem itself is never a "problem" for engineers. The existence of problem is always clearly shown by elaborating data, graph and table, therefore the emphasis is always concentrated on finding the solution.

This summer course is probably my first chance to be engaged with social science way of analyzing a problem. Briefly speaking, finding the correct answer is not the ultimate objective, since there could hardly be a standardized answer to a social science problem. Therefore, the wisdom of formulating the phenomenon, the sharpness of seeing through the superficial and random events to the buried common grounds, the agility of applying the theoretical analysis to predict or prevent future events, are basically the purposes for social science study.

Taking this summer course as an example again, students are required to firstly master the

framework and concept of the academic research field called ”securitization” raised by Copenhagen school, then to apply this theoretical tool to analyze and get the insight from a variety of specific case studies.

Through this kind of formulization training, for the first time I have understood the systematic way of social science research, and the difficulty of seeing through the superficial phenomenon must be an important skill applicable to other fields and works.

東京大学　留学プログラム報告書 （プログラム名：2012 IARU Global Summer Program）

所属学部/研究科・学年（留学時）：工学部システム創成学科
留学先大学・参加コース：　Copenhagen University / Security
コース期間：　2012 年 8 月 13 日　～　2012 年 8 月 24 日
卒業・修了後の就職希望先：　5.民間企業

1．留学先大学の概要

コペンハーゲン大学（英語: University of Copenhagen、デンマーク語: Københavns Universitet）は、デンマークのコペンハーゲンにある大学。同国で一番歴史があり、また最大規模の大学である。学生数は 37,000 人あまり、女性が59%を占め、教職員は 7000 人を越える。キャンパスはコペンハーゲン周辺に複数存在し、コペンハーゲンの中央部に最も古いキャンパスがある。

2．留学の動機

1 月からスウェーデンに一年間留学したいと考えていたので、英語で学ぶとはどういうことなのかを知り、留学するべきか否か、留学に向けて何を準備すべきかを知るために参加した。
このコペンハーゲン大学での安全保障についてのコースをとったのは、単純にテスト期間とかぶらないコースが一つしかなかったためと、国際関係に興味があったからであり、専門とはあまり関係のないコースであったが、学際的な学問であったために多少なりとも関連する部分はあった。

3．留学の準備

①プログラムへの参加手続き（申請にあたってのアドバイスなど）
ネット上に上がっていた情報とアドミニ棟に貼ってあった情報が違った。アドミニ棟のものの方が正確なので注意。
②ビザの手続き（ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど）
必要なし。
③保険関係の準備（加入した海外旅行傷害保険・留学保険等）
ソニー損保のものに加入した。
④留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど（履修・単位・試験・論文提出等に関して）
特になし。
⑤語学関係の準備（出発前の英語レベル・語学学習等）
TOEIC900 以上が目安と書いてあったのに 900 ない点数で応募したら通ってしまった。リスニングは 480/495 と苦手なわけではないが、イギリス英語に慣れていなかったこともあり、結果としてディスカッションはおろか最初の方は講義もほとんど聞き取れない状態だったため、もっと準備しておけばよかった。
読むべき課題が全日程で 1200 ページほどあり、授業開始 4 日前から現地に入ってひたすら読んでいたが全く間に合わなかった。話を聴くと英語圏出身の子にとっても多かったらしく、Reading の課題は事前に読み込んでおかないと話にならない。
⑥日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど
生活面では、コペンハーゲンの水は硬水で空気が乾燥しているので、肌の保湿用のものはもっていくべき。

4．留学生活について

①住居（住居の種類（寮・ホームステイ・ルームシェア等）、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など）
大学の紹介の寮。高かったが、自炊で食費を浮かせられるのでユースホステルよりは安く済むと思われる。

②生活環境（気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法（海外送金・クレジットカード）など）
現金は最初に 100 ドルほど両替した。
基本的に大きなスーパーはクレジットカードが使えたが、小さな店や大学の食堂では現金しか使えなかった。
外食は高いのでスーパーで買って自炊していた。
移動手段は基本的にバス。10 日以上通うなら月間の定期の方が回数券より安い。

③危機管理関係（留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など）
深夜でもバスが走っており、いたって平和だった。

④留学に要した費用とその内訳（航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算）
飛行機→マイル+サーチャージ 720$
家賃→4800DKK(6 万円)
交通費→月間定期が 300DKK(4000 円)
食費→だいたい 1 万円程度
⑤奨学金（受給していた場合は、支給機関・支給額など）
JASSO から 8 万円。

⑥学習・研究以外の活動（スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など）
なし

5. 学習・研究について
①履修した授業科目のリスト（そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。）
なし

②留学中の学習・研究の概要（授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等）
Reading の予習→授業・外部施設訪問→ディスカッション→次の日に改めてディスカッション

③学習・研究面でのアドバイス
専門以外のコースに参加するときには、その分野の基礎知識を身に着けてから行かないときつい。また、ヨーロッパならヨーロッパの知識が前提として進んでいくので、その分野に加えてその地域の背景もしっかり理解していく必要がある。

④語学面での苦労・アドバイス等
帰国生レベルの英語力がないとディスカッションはおろか早口の人の話を聴きとることも困難。最終日にはだいぶ慣れたが、適宜隣の席の子にノートを見せてもらうなど、わからないところを補うべし。

6. 留学先大学の環境について
①留学生へのサポート体制（語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等）
とくになし

②大学の設備（図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等）
Wifi あり

8. その他
①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物
なし

②今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス
英語は帰国生でないと厳しいレベル。ひたすら予習して対抗しよう。

④その他東京大学のホームページ等に掲載可能な留学中の写真があれば添付してください。

2012 IARU Global Summer Program 学習成果に関するレポート

1.
私はもともと、次の学期から交換留学に参加しようと考えていたことから、このコースに参加した最大の理由は留学が、海外の大学で英語で学ぶということがどういうことか、というのを知るためであった。この短いプログラムの中で、ヨーロッパの大学での授業がどういうものかを体感することができた。まず、授業の前に大量のテキストを読み、授業を受け、そしてそれをもとにクラス全体やグループでディスカッションを行う。これは講義だけでほとんどが構成される日本での授業とは大きく違った。
最初コースが始まった時には、英語がききとれずディスカッションどころか講義を理解するのもままならない状態であったが、最終的には講義はかなり理解できるようになり、ディスカッションでも自分の意見を持てるようになった。この 2 週間の期間の中でははやいペースのディスカッションについていくことは難しかったが、ディスカッションが学習のために与える効果は十分に感じることができた。テキスト、講義、そして他の人の意見をしっかりと理解してからでないと、自分の意見を自信持って言うことはできない。ただ講義を聞くだけでわかっていたつもりになっていたものが、自分の意見を言おうとする段階で初めて、完全には理解していなかったことが分かる。テストでは学期に一度しか自分の理解を確認するすべがなく、また結局しっかりと理解できているかどうかあやしいまま単位がきてしまうところを、毎回ディスカッションを行うことによって一回一回しっかりと自分の分かっていないところを把握してから次に進んでいくことができる。このコースを通じて、効果的な学びとはどういうものかを体感することができた。そして、今までの大学の授業ではあまり得ることのできなかった、学びをどう社会に活かすか、という視点がディスカッションを通じて得られた。
しっかりと授業ごとにきちんとわからないところを解消してから次へ進む。これについては、日本の大学で学ぶ際にも、自分で意識すれば改善できる部分であると思う。日本ではどうしても授業に対して受動的な参加になりがちだし、それは授業のスタイルに起因するために学生の努力ではどうしようもない部分があるが、自分の意識次第で学習効果を高めることは可能だ。これまでに自分の学習態度を見直し、きちんとひとつひとつ理解し、身につけようという意識を持っていきたい。
授業そのものだけでなく、授業への教授や学生の臨み方も私にとって新鮮であった。学生は教授をファーストネームで呼び、教授は学生と全く同じ立場でディスカッションや外部講師の授業に参加する。教

授も学生も、他者を尊重し、学びあおうという姿勢があるのが日本の大学にはない非常にいい環境だと感じた。
授業にとどまらず、休み時間や放課後での海外の大学生との交流もまた、いい経験となった。例をあげると、ヨーロッパ一治安がいいといわれるデンマークで、授業の一環として訪問した観光地でマリファナを打っているだとか、日本よりずっと出生率の高いデンマークの女の子が、日本の女子大生よりずっと結婚に対して消極的だったとか、当たり前のように持っていたイメージがむしろ真逆であった、という経験が何度もあった。実際接してみないとわからない偏ったイメージがあるな、と感じ、海外の環境の中で生活し、現地の人と交流する、ということ自体が自分の世界観を広げてくれるものだと感じた。

2.
問 1 で書いたように、私はヨーロッパの大学での学習環境が私にとって大きな効果をもたらすだろうと感じた。教授を含めたすべての人が積極的に他者から学ぼうとしている。海外の大学生の学びに対する積極的な姿勢、自分とは異なる考え方、あるいは将来に対する展望など、今と全く違う環境で全く違う人と共に学ぶことは、単に英語力を向上させることができ、学科の勉強について深い学びを得られる、という留学に対して漠然と持っていたイメージ以上のものが得られることがわかった。これにより、もともと考えていた 1 年の交換留学に応募しようとの決意が固くなった。
今回の留学はまた、短い期間のコースであったが、実際に他国の大学生と共に英語で学ぶ、という経験を通して、今の自分が次に留学に行くにあたって足りないものを知る機会となった。自分は抽象的な英語の文章を読みなれておらず、なかなか論文を完全に理解することができないこと、英語を読んで理解するスピードが遅いと、リスニングで単語を聞き取れても話として意味を理解することができないこと、ディスカッションに参加するための瞬発力というか、自分の意見をすぐに組み立てる能力が英語力とは関係なく足りていないこと、国際的な場に出るにあたって世界の歴史や大きなニュースといった常識として身につけているべき知識が足りていないこと、普段からものごとを批判的に考える習慣が身についていないこと、などがあげられる。
次の留学までの準備期間は 3 か月ほどしかないが、しっかりと毎日意識的に取り組むことで、次の留学での学習効果を最大化させたい。

東京大学　留学プログラム報告書　（プログラム名：2012 IARU Global Summer Program）

所属学部/研究科・学年（留学時）：工学部・3 年

留学先大学・参加コース：University of Copenhagen

Security: Theories, Practices and Dilemmas of Widening the Concept

コース期間：2012 年　8 月　13 日　～　2012 年　8 月　24 日

卒業・修了後の就職希望先：[1.研究職]　2.専門職（医師・法曹・会計士等）　[3.公務員]　4.非営利団体　5.民間企業　6.起業　7.その他（　　）

1．留学先大学の概要

デンマーク最古・最大規模の総合大学。

今回の留学先の Political Science の学部は、安全保障の分野において Copenhagen School という考え方を確立したことで影響力を持っているようです。

2．留学の動機

将来、欧米の大学院での海外留学をしてみたいという気持ちがあり、サマースクールに参加することで海外で学ぶということの雰囲気を感じ取ることができれば、と考えていました。

3．留学の準備

①プログラムへの参加手続き（申請にあたってのアドバイスなど）

不明点は、メールで逐一確認を取るとよいと思います。

②ビザの手続き（ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど）

必要ありませんでした。

③保険関係の準備（加入した海外旅行傷害保険・留学保険等）

AIU の海外旅行保険を利用しました。HP 上で簡単に申し込めます。

④留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど（履修・単位・試験・論文提出等に関して）

「留学届」の書類を提出したのみです。夏休み中に行われるプログラムのため、試験などで不都合が生じることもありませんでした。

⑤語学関係の準備（出発前の英語レベル・語学学習等）

英検、TOEFL　などを受けており、それなりに英語はできる方だと思っていましたが、いざ留学してみると全くと言っていいほど力不足でした。

⑥日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

授業で取り上げる内容についての予備知識を蓄えるとよいです。

4．留学生活について

①住居（住居の種類（寮・ホームステイ・ルームシェア等）、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など）

大学から斡旋された学生寮で生活しました。

②生活環境（気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法（海外送金・クレジットカード）など）
大学まではバスで 20 分ほど。食事は自炊することもあれば、学食・レストランに行くことも。

③危機管理関係（留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など）
コペンハーゲンは英語の通用度が非常に高く、かつ安全なまちだと思います。

④留学に要した費用とその内訳（航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算）
航空賃 13 万、家賃 7 万円ほどです。

⑤奨学金（受給していた場合は、支給機関・支給額など）
渡航期間の関係上、受給していません。

⑥学習・研究以外の活動（スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など）
週末は皆思い思いに過ごしていました。

5. 学習・研究について
①履修した授業科目のリスト（そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。）
サマースクールのため、科目名等はありません。

②留学中の学習・研究の概要（授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等）
渡航前に大量の文献を指定され、それにもとづいて授業・ディスカッションが行われました。学生の発言に重きが置かれるスタイルが印象的でした。

③学習・研究面でのアドバイス
積極的に発言することが求められますが、そのためには授業についていく英語力・背景知識の両方が必要です。

④語学面での苦労・アドバイス等
伝えたいことがあれば、とりあえず話し始めてみることが大切です。

6. 留学先大学の環境について
①留学生へのサポート体制（語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等）
特にありませんでした。

②大学の設備（図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等）
食堂は市内のレストランより格安。図書館や PC、コピー機も利用できました。

8. その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

東京大学から過去に留学された方の体験記が非常に参考になりました。

②今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

とりあえず一歩を踏み出してみることが大切だと思います。自分も不安でいっぱいでしたが、得られるものは非常に大きいです。

④その他東京大学のホームページ等に掲載可能な留学中の写真があれば添付してください。

2012 IARU Global Summer Program 学習成果に関するレポート

今回のサマースクールへの参加理由の一つとして、将来、欧米の大学院での海外留学をしてみたいという気持ちがあり、サマースクールに参加することでその雰囲気を感じ取ることができれば、と考えていた。留学に対して抱いていたイメージとしては、「なぜ日本でも学べることをわざわざ海外で学ぶ必要があるのか」と少々疑問に抱いていた面があることは事実である。しかし、実際にサマースクールに参加してみて、その考え方は大きく変わった。むしろ、留学することによって、日本に閉じこもっているだけでは得ることのできない様々な経験・刺激を得ることができたように思う。

日本と欧米の大学では授業の形式が根本的に異なるというのは以前から耳にしていたが、今回それを実際に体験できてことは有意義であるとともに、自分の力不足を痛感する結果となった。今回参加したコースは自分の専攻内容とは異なっており、予備知識が不足していたことは事実であるが、それにしても自分の英語力の不足には情けなさを感じずにはいられなかった。英語では自分の考えていることを正確に伝えられず、どうしても簡略化して伝えようとしてしまうことが最も歯がゆい思いをした点である。

また、概して欧米の学生は授業に積極的に参加していた。講師の方が話している最中でも、人差し指をあげて質問する。授業後には必ず何か質問・コメントはないかと聞かれ、大勢の学生が何かしら発言していた。日本ではこのような授業形式はほとんどないといっていいだろう。仮にこのような形式が日本で取られたとしても、質問をする学生は非常にまれである。そして、この学生の発言にこそ授業の本質があるように思えた。というのも、その質問やコメントは、概して講師の方の授業より踏み込んだ内容についてのものであり、また、発言することで学生の理解がより深まるように感じた。さらに、このようなレベルの高い発言をするためには、相応の知識を有し、かつそれらを使いこなせる必要がある。実際、サマースクールの開始前には文献リストが配布され、学生はそれらに目を通してくることが要求された。この文献はかなりの量があり、読み進めるのは非常に大変であったが、授業で扱われることについての理解を深めることができたと思う。

一方で、このような学習方法が必ずしも良いとは感じなかった。日本では、比較的授業に対する負担が少ないように感じる。しかしそれは、学問は自分の意志で進めるべきであり、逐一学ぶ内容を指定されるのは本来の姿ではない、という考えに基づいているからであろう。日本やほかのアジア諸国で行われているような一方向の講義形式も、高度な知識・考え方を得られる点で評価できると思う。欧米の形式では、なかなか議論が先に進まないといったこともしばしばであったことは事実である。しかし、全般的に欧米の学生の方が意欲的に学ぶ学生が多いように感じた。

日本と欧米の学習システムの両方を経験できたことで、知識を十分に蓄えることと、それをアウトプットしようとすることでより深い理解を得ることの 2 点が、学習を進める上で重要であることに気づくことができた。このどちらかに偏るのではなく、両方をバランスよく実践していくべきである。

国際理解という観点では、授業内容とも関係することではあるが、日本社会が世界の中でも特異なほど閉鎖的な社会であるということを強く実感した。参加者の国は多岐にわたるが、どの国も移民・他民族の共存という問題に直面しているようである。そして、人々はこの問題を強く認識している。一方日本では、確かにそのような問題は存在するのだが、一般の人々に深くは認識されていないように感じた。つまり、自分もそうであるが、自分の国で起きている問題、制度の仕組みなどについてそれほど深く考えたこともなく、なかなか他の人に説明できないという特徴があるように感じた。国際理解を進めるためには、まず自国のことを十分に理解する必要があると痛感するとともに、日本人はそのような姿勢が弱いということに疑問を抱いた。

また、このような日本人の消極的な姿勢は、例えば国際的な会議・交渉の場で不利にならざるを得ないと感じた。自分自身も消極的な方であるので、もう少し積極的な姿勢を目指していきたい。

今後、海外に行く機会を得られたならば、また挑戦してみたいと思う。今度は自分の専攻に関わる分野のプログラムに参加したい。というのも、今回のサマースクールでは自分の専攻外ということもあり、なかなか発言を積極的にする程度の理解を得るには至らず、悔しい思いをしていたからである。今後は、自分の専攻に関する十分な素養を蓄え、また専攻外のことに関しても積極的に知識を蓄えてきたいと思う。議論をするに足る下地を整えた上で、再び世界の刺激を受けることができればと思う。十分な知識を持ったうえで世界の人との議論に参加できれば、自分の考え方やアイデアを本当に広げることができると感じる。

今回のサマースクールは、海外で学ぶことの雰囲気を感じ取ることが第一目的であったが、やはりその刺激は大きく、日本の大学に通っているだけではなかなか得られない貴重な体験ができたと思う。このような機会が得られたことに深く感謝するとともに、今後の自分自身の姿勢に今回得られたことを反映していきたいと考える。